

## 金鷲旗大会でのルネッサンススピーチ

2004年7月24日

学校法人 了徳寺学園  
山田 利彦

ただいまご紹介頂きました了徳寺学園の山田です。これからこのマンモス大会である金鷲旗もいよいよクライマックスを迎える貴重な時ではございますが、少しばかりお時間を頂きまして最近徐々に浸透しつつある柔道ルネッサンス活動についてお話をしたいと思います。

これまでも多くの先生方がさまざまなエピソードを交えて柔道の原点である、マナーの向上や礼儀の大切さ、そして柔道家としてのあるべき姿等についてお話をされてまいりました。本日は私の4年半に渡る海外での指導経験を通して気付いたり、学んだりしたことを通して皆様にお話したいと思います。

私自身も現役生活を送っている際は皆さん同様に、常に強くなることやどうしたら試合で勝てるかという事ばかりを考えながら日々柔道を行っていました。そして現役を引退後、そうした自分だけのことを考えていた生活から、今度は指導する立場として柔道をより広く大きな目で見、又違った角度から触れ、その素晴らしさを伝えるにはどうしたらよいかという試行錯誤の毎日に変化していきました。そこで改めて柔道の持っている素晴らしい精神や教えを目の当たりにし、自分は本当に柔道の一部しか知らなかったのだなあと痛感致しました。その教えの代表である「精力善用」、「自他共栄」はこれまでも、そして今後も柔道に携わる者として誇りを持って後進に伝えていける素晴らしい精神だと思えます。

こうした状況は日本のみならず海外でも同じで、日本の文化である柔道がいまや世界187カ国で行われるまでに普及しました。それぞれの国でそれぞれの国固有の形でしっかりと根を張っています。私が派遣されたトルコやアメリカでも同様に、柔道の競技としての技術だけでなく、その教えも同じように伝えられ、受け継がれていることに正直日本人として、又日本で柔道を志す者として感動を覚えました。そうした国々の柔道家は一様に日本に対して強烈な憧れを抱いており、いつか柔道発祥の地、日本で柔道を学んでみたい、日本の選手と練習を行いたいという思いを抱いています。そうした声をうれしく思うと同時

に、私の頭の中に浮かんできたことは、果たしてこれだけの思いをもって訪れる海外の柔道家を十分に満足させるだけの柔道が、日本にはあるだろうかということでした。もちろん技術面や強さという意味ではまったく心配は要りません。しかし彼らが望む嘉納治五郎師範の残された真の柔道という意味では果たして純粋に継承できているかということには少なからず疑問を感じました。

強くなること、そして普段の努力が実って勝利を勝ち得ること、これらも非常に意義があり、又その過程で得ることも多々あるという事は言うまでもありません。しかし現在はその事にあまりにも偏りすぎて、柔道の持つ意味を私たち自身で狭めてしまっているのではないかと感じています。私自身その一人であったことは事実ですし、こうして皆さんの前で偉そうに言えた義理ではございません。しかしながらこの世界に誇れる日本の文化である柔道をより魅力のある、そして外国からの修行者がやっぱり日本は違う、日本に練習に来て良かったと言える柔道界にしていきたいと思えますし、していかなければならないと思えます。それにはここにいらしている皆さん一人一人が柔道の持つ精神をもう一度見直し、十分理解し、そして実践していけば必ず達成できると信じています。柔道に魅せられた私たちだからこそ、その柔道の価値を今まで以上に高めていきたいと思えます。

柔道をやっている本当に良かったと思える柔道界を私たちの手で作っていきましょう！

ルネッサンス活動は全柔連、講道館だけの運動ではなく、私たち一人一人が主役として活動していくものです。今後とも柔道ルネッサンス活動にご理解ご協力の程よろしくお願い致します。

本日はご清聴ありがとうございました。